（別紙様式４－１）　　（県立高等学校・中学校用）

熊本県立芦北高等学校　令和元年度（２０１９年度）学校評価表

１ 学校教育目標

【教育目標】
「地域の信頼と期待に応え、魅力ある人材を育成する芦高教育の創造と実践」

【目指す生徒像】
・人の心の痛みがわかる生徒
・さわやかな挨拶ができる生徒
・夢に向かって努力する生徒【 Challenge for your Dream ! 】

【教師の目標】
ア　生徒一人ひとりを理解し、優しさと厳しさ、深い愛情による教育を実践する。
イ　生徒・保護者・地域の理解を受け止め、目指す生徒像の実現に努める。
ウ　校務改革を意識しながら、「授業力」「担任力」「教師力」を高める。
エ　「人間力」を磨き、生徒が尊敬し憧れる保護者から信頼される教師を目指す。

２ 本年度の重点目標

【重点目標】　～「良い学校」に向けて～
ア　すべての教育活動における「魅力ある人材の育成」の具現化
イ　すべての校務における課題解決の推進
ウ　限られた時間内でのより効率的・効果的な教育活動・校務(事務)処理の推進
エ　掃除や整理整頓が行き届いたきれいな学校づくり

【教育方針】
ア　生徒に応じた授業の工夫と学習支援ツールの活用、個別指導により学力の確実な定着を図る。
イ　図書館活用と読書指導による、読む力、考える力、表現する力を育成する。
ウ　授業規律を確立する中で、主体的、対話的学習の具現化を図る。
エ　ＩＣＴを活用した授業を実践し、より効果的な学習指導を実践する。
オ　教科の専門性を活かしたプロジェクト学習により、課題解決型学習を推進する。
カ　生活指導を充実させ、基本的生活習慣を確立させる。
キ　生活指導と教育相談の協調により、安心して過ごせる学校づくりを推進する。
ク　教育相談体制を充実させ、自己肯定感及び他者の個性を受け入れる心を醸成する。
ケ　部活動を推進し、生徒の心と身体の鍛練と活気溢れる学校生活を実現する。
コ　自然との触れ合いや地域との交流をとおして、自然と郷土を愛し大切にする心を育成する。
サ　グローバルな視点を持ち、新しい世界へチャレンジする人材を育成する。
シ　キャリア教育の充実により、高い進路目標にチャレンジする意識を育成する。
ス　生徒会活動や学校農業クラブ活動、部活動、ボランティア活動等の特別活動に積極的に取り組み、魅力ある人材の育成を図る。

３ 自己評価総括表

評価項目 大項目	評価項目 小項目	評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
学校経営	特色ある学校づくり	魅力ある学科づくりの推進	平成３１年度の３学科の入学者７２名を超える令和２年度入学生を確保する。	中学校や地域との連携を更に深め、芦北高校の魅力を地域へ発信し、また、各科の特色を活かして生徒募集に繋げる。	A	農業科は地域と連携した取組みや商品開発を積極的に行った。林業科は公務員や国立大学進学で好成績を収めた。福祉科は外部講師等の活用に力を入れた。その結果、魅力ある学科づくりが進んだ。スクールガイドの刷新やブログの更新、ツイッターによる情報発信を心がけ、昨年を超える応募があった。
		部活動の活性化	部活動加入率９０％以上を目標として部活動活性化に繋げる。	魅力ある部活動の運営を通して、生徒が意欲的に活動できる環境を作る。部活動顧問の専門性を活かした地域との連携を深める。町の支援事業を活用したレベルアップ事業において、スポーツ界等で活躍する優れた講師を招聘し、生徒の夢へのチャレンジを支援する。	B	レベルアップ事業において部活動生徒・顧問を対象に講演を行い、生徒の意欲と顧問の指導力向上を図ることができた。また、複数の部活動と合同で行う練習を行い、生徒同士または顧問同士で刺激となる練習を行うことができ、顧問の指導観の交換を行うことができた。さらに、ツイッターで部活動の結果を随時アップすることもできた。
	危機管理	不祥事防止の徹底	不祥事ゼロを目指し、地域から信頼される学校づくりを目指す。	月に２回、芦北高校不祥事防止確認事項を朝礼で読み上げ、不祥事防止意識を高める。定期考査や長期休業期間に職員研修を実施する。	B	不祥事防止確認事項の読み上げは月２回朝会時に行うことができた。職員研修は平均月１回行い、うち不祥事防止に係る研修を３回実施した。
学力向上	授業力向上のための取り組み	授業の充実	校外の各種研究授業や講習会に年１回以上参加して、指導力の向上や技術の習得に繋げる。 専門教育におけるＴＴ授業の活用。	各教科でアクティブ・ラーニングを重視した授業改善を行い、わかる授業の実践に努める。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導力向上と技術の習得及び安全確保に配慮する。	B	全教科において教育課程研究協議会に参加し、新学習指導要領及び授業改善、評価等に関する校外研修を受けた。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導をすることができた。
			公開授業週間を年２回、研究授業を各教科年１回、授業評価を年２回実施する。	研究授業では、同一学科を対象に専門学科と普通教科で連携して実施し教科横断的な視点に立った取り組みを行う。生徒の授業評価を実施し、課題の分析による授業改善とＩＣＴを活用した授業を展開する。	A	校内研究授業は当初の予定と変更した部分はあったが、年間を通して実施できた。芦北町の総合的な支援で導入した各教室の電子黒板を授業で積極的に活用できた。２学期末の授業評価アンケートの結果を比較して、授業の改善傾向が見られた。
	「確かな学力」の定着	自ら学ぶ学習の奨励	生徒一人あたり年間１０冊以上の読書量の確保を目指す。 毎月１回、漢字テストを実施する。 生徒一人あたり１時間以上の家庭学習量を確保する。	朝の１０分間読書の充実を図る。 月１回の漢字テストの実施と事前学習に力を入れる。 家庭学習時間確保のため課題を工夫する。 長期休業期間中、課題を出し学習させる。 町の支援事業で導入したスタディサプリを学科・学年及び教科で活用する。	B	朝読書の時間に他の学習をするなどがあった。職員への趣旨の周知徹底と共通理解を図りたい。漢字テストは学年が中心となり成果を上げ、基礎学力向上につながっている。長期休暇中の課題は各教科で計画的に出題されている。スタディサプリは進学ゼミや公務員指導で積極的に活用されている。
キャリア教育（進路指導）	進路目標の早期確立	進路情報の収集と活用	生徒の進路選択の情報として各学期２回以上進路行事を行い校内外のガイダンスや見学会に生徒が２回以上参加する。	細かな進路希望調査、生徒一人ひとりとの進路面談を通して、進路希望を具体的に把握し、実現へ向けた積極的な働きかけを行う。	B	校内進路ガイダンス、企業見学をはじめ、多くの進路行事を実施できた。学年を問わずオープンキャンパスや就業体験への参加も積極的であった。３年内定者に対する就業前セミナーも実施し、意識を高めることができた。

		進路保障	２月末には、希望進路達成１００％を目指す。 全職員による面接指導の充実。	進路希望調査を基にした進路指導や企業求人開拓の実施、進学支援体制の確立や個別指導の充実を図る。	A	公務員は過去最高水準の合格実績を得ることができ、全学科から合格者を出すことができた。進学は国立大学をはじめ全員が志望校合格を果たした（１月末時点）。就職も１００％内定した。小論文や面接等の指導を、全職員で協力して行うことができた。
	資格取得の奨励	年間実施計画の提示と推進	生徒一人ひとりが進路実現に繋がる資格取得に２つ以上挑戦できる環境づくりを目指す。	各学科や学年、クラス、教科の協力のもと、資格試験の周知や勧誘を行い、資格取得の学習支援体制を確立する。	B	各学科・学年の協力もあり、昨年度並みの検定試験への取組があった。一方、３年生の履歴書資格欄に「特記事項なし」と記載する生徒が若干名おり、残念であった。
生徒指導	健全な心身の育成	基本的生活習慣の確立とコミュニケーション能力の育成	「人の心の痛みがわかる魅力ある生徒」の育成。遅刻者の減少と整容指導の徹底。挨拶の励行と責任ある行動。公共意識を向上させる。特別指導件数１０件未満を目指す。	挨拶運動・登下校指導や学校生活全般において、思いやりの心と責任ある行動を意識づけさせる。月１回の全校集会・全職員による服装検査授業前の整容指導を実施する。	B	学校生活全般において落ち着きのある生活ができた。学校行事では活気あふれる主体的な活動が見られ、随所で他者を思いやる態度が見られた。 朝学習や課外に遅刻する生徒は若干見られたが、SHR開始間際の遅刻者はほとんど見られなかった。クラス内での整容事前指導を実施することで不合格者は減少傾向にある。運動部活動生を中心に元気な挨拶ができている。
	情操教育の推進	安全教育の理解と徹底	交通違反・交通事故０を目指す。校内だけでなく、校外での二輪車施錠率の向上を目指す。薬物乱用等に対する理解の徹底。スマートフォン使用に係る情報モラル教育の実施。	クラス指導の他に、講話・講習・講演会を実施し、話し合いの場を設ける。交通委員による二輪車の施錠呼びかけ。関係機関と連携した情報安全教育の講演会を実施するとともに、スマートフォンの使い方、ＳＮＳ等における情報モラルに関する教育を徹底する。	B	新入生とその保護者を対象に情報安全講話を行った。生徒指導交通担当による二重ロック調査と指導を実施した。また、原付通学生を対象とした安全講習会を開催した。学校薬剤師をお招きし、薬物乱用防止に関する講演をしていただいた。防犯については行事ごとに事前指導を徹底させ、貴重品の管理を促した。
人権教育の推進	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	全職員が校外研修会へ１回以上参加し、意識向上と指導力向上を図る。	職員への研修案内と参加呼びかけを定期的に行い、全職員校外研修に参加する。 ＬＨＲ等での指導力向上に向けた事前研修の充実を図る。	B	職員の研修参加については、朝会やゆうnetへの掲載で年間を通して参加を促した。参加率は５０％であった。ＬＨＲは学年会での事前研修により、指導内容を充実させることができた。
	すべての教育活動を通した取組の強化	課題を抱えた生徒への支援と対策	各校務分掌と連携を図り、生徒の実態を把握し、いつでも、どこでも、すぐに対応できる職員の体制作りを行う。	担任・学年会・教科会・特別支援教育・教育相談の各担当者との連携を図り、研修をとおして全職員の共通理解を深め実践力を強化する。	B	教育相談委員会の中で、各学年・保健室担当と情報交換を行い、課題を抱えた生徒への対応について協議した。各学期「心のアンケート」を実施することによって、生徒の心の状況を知ることができ、いじめの早期発見にもつながった。
	命を大切にする心を育む指導の充実	命の大切さを実感させる教育の推進	命を大切にし、自尊感情を高め、お互いを理解し合い、認め合う心を育てる。	全校集会やサマースクールなどで命に関する全体講話を実施する。教育活動全体を通して全職員が自分の言葉で語り、生徒と共に互いの信頼関係を築く土台作りをする。	B	全校集会の講話は、普段と異なる先生の一面を垣間見ることができ、生徒との距離を縮めることができた。良好な信頼関係を築くうえで有効であった。
いじめの防止等	いじめ根絶の啓発・推進	いじめを絶対に許さない学校づくり	人の痛みがわかる生徒の育成。 いじめに関する問題行動の根絶を目指す。全クラスで生徒面談を学期１回以上行い、情報収集と共有に努める。	いじめ防止に関する講話を実施して、生命や人権を大切にする心を育む。 「目指す生徒像」「いじめを許さない宣言文」を教室に掲示し、啓発に努める。	B	人権教育ＬＨＲを各学期１回実施した。差別を許さない心、人の痛みがわかる心の育成に努めた。さまざまな差別の現実を知り、被差別の立場に立って物事を考えることができるよう、講師招聘等も今後考えていきたい。

	いじめの防止と早期発見	いじめ防止や早期発見・早期対応	心のアンケートを年３回実施して、いじめの実態を把握し、対策を早急に取る。 いじめの把握においては、関係機関と連携を密に取り合い早期対応に取り組む。	心のアンケート結果を基に、実態把握に努める。（年３回のアンケート実施） いじめ防止等対策委員会を３回実施し、外部識者から指導・助言を仰ぎ、取組についての検証を行う。	A	各学期１回「心のアンケート」を実施した。生徒の率直な考えや思いを知ることができ、「いじめ」へと発展する手前の生徒間トラブル等についても把握することができた。学年・生徒指導部との連携もスムーズであった。
教育相談	特別支援教育	支援対象生徒について早期の支援開始	保護者、中学校、職員から得た情報を迅速に集約する。生徒理解の職員研修等を学期に１回行い、全職員の共通理解を図る。 保護者の理解を得て、支援を開始する。	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」で新入生の実態を４月中旬までに把握する。「気づきメモ」週間を学期に１回実施する。教科担当者会をふまえ、個別の教育支援計画を作成し、生徒理解研修を実施する。	B	新入生の実態把握に努め、年度初めに生徒理解研修を行い、職員間での共通理解を行った。また、支援対象生徒について担任による個別の教育支援計画・指導計画の作成を行い、その後の生徒理解研修に結びつけることができた。今後も各教科における学習評価の方法を工夫していきたい。
		支援対象生徒の進路保障	支援対象生徒（３年生）の進路決定１００％を目指す。 １･２年生の進級を目標に、あらゆる場面で支援を行う。	担任、進路指導部、教育相談部、関係機関と連携を取り、保護者の理解を得て進めていく。	B	学年と進路指導部との連携により、支援対象の３年生については早い段階から取り組みができた。１・２年生については職員間での共通理解を今後も深めていきたい。
	教育相談	生徒の実態把握と課題解決	欠席が続く生徒、その他精神面への支援が必要な生徒の課題解決を図る。 職員が一人で抱え込まないための相談体制の充実を図る。	定期的に教育相談校内委員会を開催し情報交換を行う。 スクールカウンセラーを活用し課題解決に向けた方策を検討する。 必要に応じて医療機関や福祉事務所等と連携を図る。	A	定期的に教育相談委員会を実施し、情報交換を行った。またスクールカウンセラーのカウンセリングを中心に、医療機関等との連携も取ることができ、その後の指導にも役立てることができた。
地域連携（ｺﾐｭﾆﾃｨ･ｽｸｰﾙなど）	コミュニティ･スクールをはじめとした地域連携の体制づくり	災害時の地域連携体制づくり	学校運営協議会を２回開催し、災害時における地域連携の基本計画を作成する。	町との連絡体制、地域住民の受入、避難所運営、地域合同防災訓練への参加等の検討。	B	学校運営協議会に町役場や学校周辺地区の代表者に参加いただき、意見交換ができた。発災時や災害に備える取り組みで地域連携する必要性を共通認識した。
		学校安全総合支援事業（防災）	全ての生徒が安全(防災)に関する資質、能力を身につける。芦北高校、水俣高校、芦北支援学校の拠点校が中心となり地域の防災教育を推進し、管理体制の充実を図る。	実践的な避難訓練や学校防災教育の手引きを活用した授業の実施。危機管理マニュアルや学校安全計画の実証、改善。地域特性を理解し、関係機関、団体と連携して効果的な学校安全に取り組む。	B	防災教育を実施し、生徒は自然災害についての知識や避難行動、ハザードマップの活用等について学習した。また、職員の連携を意識した実践的な避難訓練の実施や危機管理マニュアルの改善など、全職員で防災管理について考えた。拠点校として取り組む中で生徒、職員の災害安全についての見識を深めた。
		平常時の地域連携体制づくり	学校運営協議会の１回を、平常時における地域連携に充て、具体的方策を協議する。	佐敷小・中学校及び芦北支援学校本校・佐敷分教室との交流活動、乙千屋地区住民の参加型交流活動の検討。	B	学校運営協議会を通して佐敷小、佐敷中、芦北支援学校、学校周辺地区との情報共有ができた。災害時以外での地域との連携は今後の検討事項としたい。
		芦北町芦北高校総合支援事業の有効活用	芦北高校総合支援事業を有効に活用する。	各事業の趣旨を踏まえ、十分な効果が高まる活用を実践する。特にレベルアップ事業の活用と、生徒の進路決定につながる活用に力を入れる。	A	今年度は、全教室に電子黒板を導入しＩＣＴを有効に活用する体制が整った。校内研修も行い、今後の効果が期待できる。レベルアップ事業は、各科や教科の特性を生かした内容で実施できた。町からの支援に応えられる取組みをさらに進めたい。

４　学校関係者評価

（１）進路実績を見ると、中学校としても学力をつけて送り出したい。どうしたら専門高校から熊本大学教育学部を受験できるのか。中学校でも話題になった。

（２）今年は、テレビでも芦北高校が良く出ているが、とてもうれしく思う。もっとアピールしてほしい。

（３）佐敷中学校の４割は芦北高校へ行く。とくに大野小学校出身の子どもたちは、芦北高校生との交流経験があり、林業科への希望が多い。小学生時代の交流は有効である。

（４）文化祭において、分校室とコラボした取組みは、良い取組みで感動した。これからもこの取組みを続けてほしい。

（５）福祉科を卒業して福祉分野で働いている人は、離職者が少ない。しかし、現実とのギャップを感じるときが来るので、学校でも少し話をしておいてほしい。

（６）地域からの声として、人材不足の現状から「高校生のアルバイトを認めてほしい」と聞いている。社会に出る前の経験としてもよいのではないか。

（７）芦北高校も電子黒板の導入が進んだが、中学校においても、すでに導入されており、３人に１人のタブレットもある。そういう生徒たちが入ってくる。慣れるのは生徒が早く、職員の方がハードルが高いように感じる。

５　総合評価

（１）重点目標として～「良い学校」に向けて～を掲げ、生徒が主体的に取り組む学習活動を実践し、家庭、地域との連携を深めながら「地域の信頼と期待に応え、魅力ある人材を育成する芦高教育の創造と実践」を展開することができた。

（２）生徒募集では、芦北町の支援事業と併せて、職員一人ひとりがそれぞれの立場でＰＲ意識を持ち、生徒の姿を前面に出す広報活動をさらに進めた結果、年度当初に設定した目標を上回ることができた。

（３）部活動の活性化が学校の活性化に大きく貢献している。空手道は２年連続九州 No. １となり、新体操も九州 No. ２となった。全国大会の出場も果たした。サッカー部の地域連携及び、地元小中学生にも呼びかけた運動部活レベルアップ事業の実施も見られた。

（４）学校農業クラブ活動では、学校農業クラブ連盟熊本県大会においては、出場したすべての競技に入賞している。また、全国大会では農業鑑定競技（森林の部）とフラワーアレンジメント競技大会に出場した。

（５）職員の授業力向上に向け、ＩＣＴ機器の活用をいち早く進めるため、職員研修の実施や講師招聘を行った。研究授業においても職員の相互評価に協働・強調的な要素を取り入れた。次期学習指導要領について研修を深め、アクティブ・ラーニングの取り組みを強め、さらなる授業改善を進めていく必要がある。

（６）今年の３年生は在籍数も多く、進路指導は対応が難しかったが、公務員はこれまでで最も良い合格実績を得ることができた。農業科や福祉科からも合格者を出すことができた。進学は国立大学２名合格をはじめ全員が第一志望に合格を果たした。就職も１００％内定した。

（７）人権教育では、「人の心の痛みがわかる生徒の育成」を目指し、人権尊重の精神を高める多くの取組を行った。また、「心のアンケート」や面談により生徒の把握に努め、対策委員会を積極的に活用した。また、職員間で生徒指導の共通理解を図るよう努めた。いじめや生徒間のトラブルには早急に対応し、事案の早期解決を図ることができた。

（８）特別支援教育では、多様化した生徒が増え、個別の支援計画の作成しながら対応を進めた。ＳＳＷや支援学校のコーディネーターとの連携も進めた。スクールカウンセラーとの教育相談でも多くの成果をあげる事ができた。

（９）今年度は、学校安全総合支援事業の指定を受け、学年毎の防災教育の実践や防災士やコーディネーターと連携した避難訓練を実施できた。災害時以外での地域との連携は、今後も検討を重ねていきたい。

(10) 芦北町の支援事業では、今年度、全教室に電子黒板を導入しＩＣＴを有効に活用する体制が整った。校内研修も行い、職員の利用頻度も格段に増えた。海外研修や資格取得、部活動生の競技力向上、スタディサプリの活用、修学旅行での学科の特性を生かした取り組みに有効活用することができた。

６　次年度への課題・改善方策

（１）芦北町の支援事業を受け、生徒のレベルアップと町への還元をテーマに、生徒のチャレンジ精神を刺激する魅力的な取組をさらに進め、生徒募集につなげる。

（２）進路指導では、地域の後継者育成を目指す一方で、国立大学への進学指導にも力を入れ、地域の中学生の進学ニーズにもしっかり対応していく。

（３）本校職員の超過勤務時間は決して少なくない。質の高い指導を維持しつつ働き方改革を進める中で、超過勤務時間の短縮を図る。

（４）学校改革の取組をさらに進め、職員の負担感軽減、業務の効率化、部活動の適正化に繋がる取組を進めていく。

（５）本校の魅力発信を広げる広報活動に全職員で取り組み、地域との連携を深めた学校教育を推進し生徒募集につなげる。

（６）新しい学習指導要領にともない、各学科の「目指す生徒像」を具現化できる教育課程編成を進める。

（７）教科指導では、生徒の知的好奇心を刺激し、主体的な学びを引き出す授業づくりを目指す。また、生徒の授業評価を職員の自己評価に反映させ、指導力向上への工夫改善に取り組む。

（８）専門教育では、各学科間の連携や協働、大学や地域団体との共同研究を深め、生徒や地域のニーズを的確に受け止めながら地域と連携した教育活動をさらに展開する。
（９）校内には、使用不能となった機器や不要の机、椅子等が数多くある。これらの処分を進め、スペースを有効利用する。
(10) 芦北支援学校高等部佐敷分教室との交流及び共同学習は、各学科の学習活動や生徒会活動、職員研修等における連携を更に深め、充実を図る。